



左からACに遊びに来た祖母、筆者、ドイツ人の友人

の村との試合で思いっきりプレーし相手チームと一緒にシャワーを浴びれば、伸び放題の髪を靴紐で結んで試合に出る変な日本人と、以降村でも声を掛けられるようになる。この「スイッチ」のお陰で、学業の成果はともかくとして、かけがえのない友人とフッカー(スクラム最前列の中央)の定位(二五人ピッチリしかいないチームなので当たり前だが)を得て、二年間を過ごした。

♪ 面白いこと、素敵なことがあるはず

大学卒業後、放送局に入社し、ラジオの可能性に目覚めて以来ラジオ一筋。ラジオは基本的には一人で身軽に取材に出かけられることがその特性である。バンコクからシンガポールまで各停の超鈍行列車に乗る

取材では、偶然乗り合わせた学生の農家の農家に三日間泊めてもらって農作業を手伝い、チェコではビール工場の醸造責任者の家に泊まりこみ仕事漬け・ビール漬けになり、大洪水のパングラデシユでは腰までの水を掻き分けてダッカ市内を歩き回った。国内でも、昨日取材で知り合ったタクシー運転手さんの家に入りこみ、コタツに足を突っ込んで一緒にミカンを食べる、なんて毎度のことであった。

すべてはこの「スイッチ」のお陰である。単純な「積極性」でも「物怖じしない」でもない。どこの国のどんな相手にも、必ず面白いこと、素敵なことがあるはず、との信念のもとに、一歩踏み出して話を聞きに行く。それが私にとっての「国際理解」であり、それを教えてくれたUWCという環境と、チャンスを与えてくださった皆様には、深く感謝したい。

二〇〇一年にACで開かれた同窓会の後、一八年ぶりに再会したカーディフの友人宅に一泊。その友人のダンナとビールを挟んで盛り上がってしまったのは、今でも現役で続けているラグビーの話題であった(右下写真)。その後はラジオのメディアアーマーケティング関連の仕事でロンドンを毎年訪れているが、仕事を抜け出してパブで会う



プレーする筆者

©Koichi Suzuki

のは、やはり当時から友人である。まるで十数年の空白などないように、今読んでいる本の話や最近の音楽の話まで語り合える。

昨年末には、三カ月前に飲み交わしたばかりのそんな友人の突然の訃報が届き、心底辛い思いをした。しかし、彼の存在も私のこれまでの原点であり、スイッチを入れることができる若者が、一人でも多く生まれるよう、微力ながらお手伝いしたいと考えている。

一步踏み出すための「スイッチ」

一九六三年生まれ。一九七九―八一年UWC英国アトランティックカレッジ(ACC)。八六年京都大学法学部卒、東京放送(TBS)入社。以降一貫してラジオ部門制作・編成・営業を経て現職。

TBSラジオ&コミュニケーションズ
経営企画室担当部長

平山直樹

ひらやま なおき

❖ 呆然として三カ月

ヒースロー空港からM3という高速道路を走る。イングランドの町々の外れには、グラウンドとも牧場ともつかない緑地が広がり、白いサッカーゴールが点々と設けられている。ところが車がウエルズに入ると一変し、町外れにはラグビーのゴールポストが誇らしげ(?)に立つ。やはりウエルズはラグビーの国だ。

高校二年になるとみな予備校に通い始め、三年になる前にクラブ活動からは引退、「そんなもんさ」とちよつと醒めたポーズで受験勉強に突入する。私は、それが当たり前の受験校の高校生活にどうしても納得できない、青臭いラグビー部員であった。それなら日本の外に行くしかないな、と思

いつめ、UWCの試験を受けた。「大志」というにはあまりに小粒な志望動機で、恥ずかしながらこれが初告白である。

車窓のゴールポストにドキドキしてACCに到着した方がいいが、学校のラグビー部の練習では、ウエルズはもちろん、仏・南ア・フィジーなど強豪国出身の学生がごろごろ。言葉の問題で何の練習かも分からず、後をくつついて走るので精一杯であった。学業も同様で、教えられるというより意見を求められる授業。学生に自分で考えさせて、意見を言わせることで、知識を本當の糧にする。発言が頭越しに飛び交う中で呆然としている間に三カ月がたった。

❖ スイッチが入った

状況を変えたのは最初のクリスマス休暇。

●(社)ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに三八八名の卒業生を輩出している。

汽車を乗り継ぎヨーロッパ各地をウロウロ。「ウチに来ないか?」と誘ってくれたACCの友人の家を泊まり歩き一カ月余り、行く先々に『ボク』がいた。つまり私の友人の、地元の友人たちである。彼らも必ずしも英語ができるとは限らず、目の前に突然現れた日本人とどう話せばいいのか戸惑っている。しかし、英語ができない同士はかえって気楽で何とかなるものである。問題は、いかに「この相手と何とかコミュニケーションをとるぞ!」とカチンとスイッチを入れるか、であった。戸惑っている暇はない。そしてこちらが一步踏み出せば、何とか向こうも答えようとする。

こんな調子でスイッチが入りっぱなしで旅行を終え学校に戻ると、世界が一変していた。授業は相変わらず全部は理解できないものの、飛び交う意見も舞い上がらずに聞いてみれば想定内の意見だし、自分も拙いながらも食いついていけば、じつくりと聞いてくれる。ビールグラスを挟んだ友人との議論も同じこと。ラグビーでも、近所